

カンボジア大水害

(2000年10月)

三宅島噴火

(2000年6月)

東海豪雨

(2000年9月)

SVA緊急救援活動報告書



SHANTI
VOLUNTEER
ASSOCIATION
社団法人 シャンティ国際ボランティア会(SVA)
〒160-0015 東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3F
【電話】03-5360-1233 【Fax】03-5360-1220
【URL】<http://www.jca.apc.org/sva/>

ご支援ありがとうございました

昨年の、三宅島噴火、東海豪雨、カンボジア大水害では、多くの方が財産を無くし、近親者を失い、生活の基盤を喪失したりと、心身ともに大きな打撃を受けました。これらの方々を支援しようという昨年のSVAの呼びかけに、今回も多くの方が応えてくださいました。三つの救援活動のために皆様から寄せられた寄付は2853万8574円に上りました。厚く御礼申し上げると共に、ここに救援活動の報告をお届け致します。

日本の内外で、自然災害が多発しています。今回の報告書にあげました3つに留まらず、北海道有珠山噴火(2000年3月)、鳥取県西部地震(2000年10月)、そして現在、SVAが救援活動をおこなっている今年1月のインド西部大地震と大きな災害が続いています。

これらの災害は、いずれも自然の脅威によつてもたらされたものです。しかし、その被害を大きくした原因の一つは、まぎれもなく社会構造そのものにあることも確かです。

SVAは今後とも、被災者が直面している困難な状況に、効果的ですばやい救援活動を実施することを心がけます。同時に、被災者が生活を復興する過程においては、より災害に強い、より暮らしやすい社会作りを被災者と共に進めていきます。

尚、本文にもありますように、三宅島から全島避難を余儀なくされた島民は、まだ帰島のめどが立たず、困難な状況での生活を強いられています。継続しての支援が必要とされています。皆様から寄せられましたご寄付のうち1126万1414円は、今年度以降の三宅島島民の支援、そして帰島の際の生活復興支援の費用として繰り越させていただきました。

皆様のご協力にあらためて深く感謝申し上げます。

2001年8月

社団法人 シャンティ国際ボランティア会
会長 松永 然道

**カンボジア国民の
10人に3人が被災した**

2000年7月末から始まった洪水について、カンボジア国家災害管理委員会の最終報告書では、その被災規模は72万8880世帯、死亡119人、水田11万9695ha、特別市を含む24州の内17の州と特別市が被災。国民の10人に3人が被災したことになる大災害となつた。ブノンペン市を横断するメコン河の警戒水位は10.5mだが、過去のメコン河ブノンペン市警戒水位の記録で比較すると1992年に11.05m、1996年に10.93m。今回は過去の記録を更新して11.2mに達した。休



ポートで食料をとりこくる村人（カンダール州）

日や夕方に市民の憩いの場となつてゐるメコン河畔のフンセン公園地点の水位は地表とほぼ同じになり、土嚢を積んでなんとか水の浸入を防いでいたが、市民の間ではブノンペンが冠水するのでは、という不安が募つていた。

食用米、種もみを配布

SVAは、国際社会への緊急アピールがカンボジア国家災害管理委員会(NCDM)から発表されると同時に緊急救援活動を開始。9月15日にカンダール州で24トンの食用米を配布することから始めた。また、水位が下がり始めた10月末からは次期の食糧確保を目的として種もみの配布へ切り替えた。対象地の選定はNCDMとカンボジア赤十字と調整の上、極力支援の重複を避けるようにした。



カンボジア全土で記録的な大雨 72万世帯が被災

SVAは、延べ16,333世帯79,074人へ食用米237.5トン、種もみ176.7トンを配布

ベトナム、カンボジア、ラオスなどメコン川流域では、2000年の7月より12月にかけての大洪水が発生した。カンボジアの2001年の降雨は例年になく多量で、メコン川の水位も激しく上昇して危険水位を突破。首都ブノンペン周辺に住むSVAブノンペン事務所の職員の家にも、浸水の被害が出た。



ポートで救援

この洪水によりメコン河、トンレサップ河に接する村々では大人の胸あたりまで水没。道も戸もなくなり、人々は家畜と共に高台にある寺に避難。SVAの救援活動は寺の境内で、寺委員会とともに実施された。また、スヴァリエン州へは、国道が寸断され、そのため、SVAスタッフはブノンベン郊外より何時間もかけ、ポートで救援対象地までいくことになった。

手渡しで、米を配布

被災したカンボジア人から、「日本でも三宅島噴火や東海豪雨で被災した方々が大勢おり大変であるにも関わらず、カンボジアへの支援を頂き誠に有難い」との感謝の言葉を何度も頂いた。まだ陽も昇らないうちから、陸路と水路で米を運搬し、一人ひとりへ手渡しで米を配布する活動は大変な労働であったが、力ができたことは、われわれスタッフにとっても冗談と笑顔を絶やすず、また支



援をした日本人への気遣いの言葉もあり、恐縮する場面も多かった。救援活動の最前線にあたったカンボジアスタッフの「絶望の淵に立った時に人間はじめて将来の本当の希望を見出せるのかもしれない」という言葉も印象深く心に残っている。

当初は、国連食糧計画(WFP)とともに、1世帯当たり10kgの米を配布した(WFPは、カンボジアの成人の一日に摂取する米の量を200gと推計)。しかし10kgの米では5人家族でも、10日分にしかならない。また農村部では大家族世帯が多く、配布を行った地域での聞き取りでは10kgの米は5日分でしかないとの返答も多かった。このため、洪水が長引いていることと救援活動中の聞き取り結果から途中で世帯あたりの配布量を20kgに増やし10日から半月は急場を凌げるようとした。

配布実績一覧

対象地	配布世帯と人数	食用米	種もみ
カンダール州(11地区40村)	10,034世帯 46,318人	111,497kg	176,700kg
スヴァリエン州(22地区107村)	6,299世帯 32,756人	125,980kg	
合計(33地区147村)	16,333世帯 79,074人	237,477kg	176,700kg



寺委員会と一緒に食用米の配布(カンダール州)

私は2000年9月から11月にかけて、SVAの緊急洪水対策支援の仕事に携わった。

洪水の被災者が、水に覆われてしまった土地で生活するのは非常に困難なことである。

衛生状態は悪く、避難所が足りずにホームレスになつた人もいた。また食糧が不足し、人々は飢えに耐えねばならなかつた。子どもにとっては特にそうだ。なぜなら、子どもたちは、遊んだり、動き回ったり、友達と会つたりするのが常だからである。洪水はこうした子供たちの活動を不可能にし、親たちは常に子どもたちの安全を確認しなければならなかつた。

しかしながら私が思うに、人々が直面したものとも深刻な問題は、洪水後にいかにして生活を復興すればよいのかということであった。外部からの支援は一時的なものだからである。既に収穫され、少なくとも6ヶ月か1年間は生活の糧となつたはずの食糧は、洪水によって流されてしまつた。このことは、ある人々を絶望と貧しい生活に追いやることにもなつた。カンボジア人は、良きリーダーが地域に

いる場合には、その真価を遺憾なく發揮することができる。しかし、そうでない場合には、物乞いになる可能性もある。SVAは洪水の犠牲となつた人々に対して、種もみを提供するなどの支援を行い、彼らに希望を与えた。種もみは人々が長期にわたつて自分たちの生活を支えることを可能にした。単に助けを求めるだけではなく、自分たち自身で将来のより良い生活のために働くことができるのだ。

私は、甚大な被害を及ぼす自然災害を未然に防ぐ、あるいは少なくとも軽減するだけの根本的な対策を定めるよう、カンボジア政府に対して求めたい。政府は災害対策のための事業を段階を踏んで行う、あるいはそのための何らかの計画を立てることが可能なのだ(たとえば、無秩序に森林を伐採しない、貯水池を作るなど)。

最後に、私は一人のカンボジア人として、常にカンボジアを支援してくれている日本の方々に感謝を述べると共に、皆さまのご多幸をお祈りしたい。ワシ・ソビック(SVA)

救援活動に携わったSVAカンボジアスタッフより

員】

ブノンベン事務所総務副調整
人として、常にカンボジアを支援してくれている日本の方々に感謝を述べると共に、皆さまのご多幸をお祈りしたい。ワシ・ソビック(SVA)

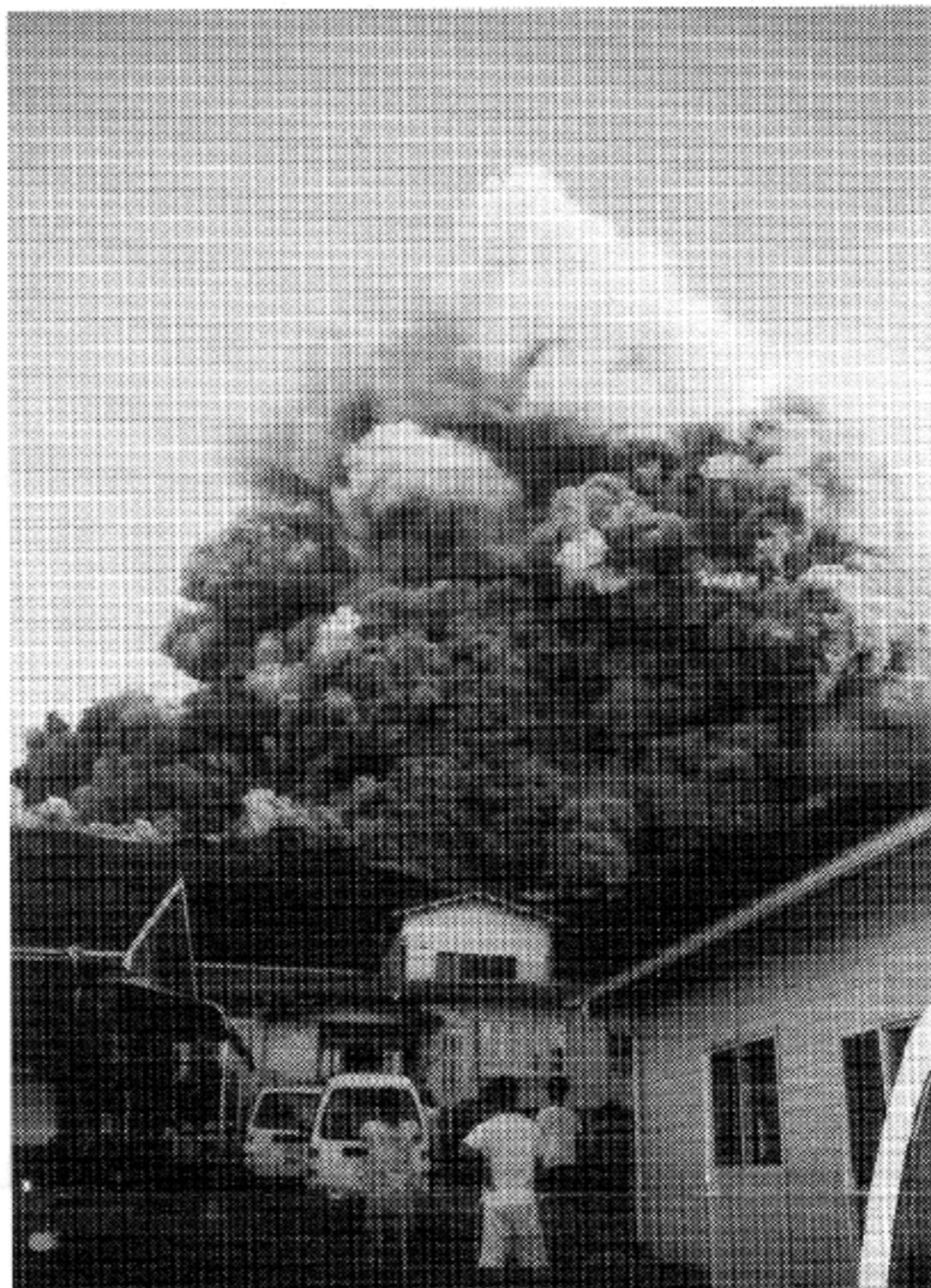
の事業を段階を踏んで行う、あるいはそのための何らかの計画を立てることが可能なのだ(たとえば、無秩序に森林を伐採しない、貯水池を作るなど)。

最後に、私は一人のカンボジア人として、常にカンボジアを支援してくれている日本の方々に感謝を述べると共に、皆さまのご多幸をお祈りしたい。ワシ・ソビック(SVA)

三宅島噴火

全島避難と長期化する避難生活

帰島のめどは立ず



東京都では、希望者全員に空いている都営住宅の斡旋や必要な生活物資の配給をしたが、長期化する避難生活は、三宅島の人々に大きな影響を与えていた。帰島のめどが立たないため長期的な生活設計が立てられない。半数以上の人が求職活動中で、また収入が減少した世帯は8割に達し、無収入世帯も32%に及ぶという。しかも、自営業者に限れば、無収入世帯は半数を超える。

2000年6月26日に三宅島の雄山が噴火。9月2~4日には、約3,800人の全島民が島を離れた。現在、島民は東京都のほぼ全域と全国20府県で避難生活を生活している。

すでに避難後10ヶ月以上が経過したが、いまだに高濃度の亜硫酸ガスが発生しており、いつ帰島できるのかめどすらも立っていない。2月には気象庁火山噴火予知連絡会より少なくとも一年間は帰島するのが難しいとの統一見解が発表されている。

三宅島始まつて以来の全島民避難

ボランティア団体と連携したSVAの支援活動

会議の開催、島民向け生活情報ニュース「みやけの風」の発行、島民ふれあい集会の実施などである。また、島民自身による電話サービス「三宅島ふれあいコール」もはじめた。これからも三宅島の皆さんのがんばり活動は続くが、SVAは、東災ボの一員として、三宅島支援センターの活動に協力・連携する形での地道な支援活動に協力していく予定である。■

SVAは、「東京災害ボランティアネットワーク」(東災ボ)の一員として、7月下旬の三宅島での除灰作業、街頭募金活動、2回開催された三宅島島民ふれあい集会でのボランティア派遣などの活動を行った。また、全島避難後の9月14日には、東災ボをはじめとする4団体で、継続した支援活動が展開できるよう三宅島災害・東京ボランティア支援センター(三宅島支援センター)が設立され、SVAは、東災ボを通じて、同センターに対して110万円の資金提供を行った。

同センターは、散り散りに暮らしている三宅島の人々が暮らしている三宅島の人々が暮らして、島民電話帳の作成、情報提供をおこなうためのFAX機の提供、島民連絡

緊急救援・東海水害報告

まさかの豪雨

水が引いてからが大変

水が引いた直後の室内(2000年9月愛知県西枇杷島町)

2000年9月11、12日の2日間に降り続いた豪雨は、東海地方に大きな被害をもたらした。愛知県だけでも6万5千棟が床上・床下浸水などの被害があった。特に、被害がひどかったのは、新川が決壊した西枇杷島町で、全世帯数の約7割が床上浸水し、町全体が水浸しになった。「玄関に水が侵入してきたと思ったら畳の上に浸水。あつという間に腰まで水につかって」と、2階に避難して命拾いをした被災者が、その時の様子を語った。

しかし、水害は、水が引いてからが大変である。地震と違い建物は残っているものの、家具や電化製品は使えなくなり、生活用品・思い出の写真など、すべてを失う。しかも、畳をはがし、泥をかき出し、家中拭き掃除をしなければならず、掃除が終わっても家の中を乾かし、臭いがなくなり、再び住めるまで長い時間が必要だ。しかも、借家だと大家とのトラブルから元の家に戻れないケースもあった。このように生活再建が大変にも関わらず、義援金

片付をする住民とボランティア(2000年9月愛知県西枇杷島町)



は、もっとも2回に分けて12万円のみが支給されただけで、畳すら満足に買えない状況である。

水害後しばらく経過してからも、強い雨が降ると子どもが当時のことを思い出して泣き出したりするなどの災害後の心的ストレスが報告されたり、ある地区では、水害の危険地区として認識されていたにも関わらず、行政が事前に十分な対応を怠ったとして訴訟が起る可能性もあり、災害の後遺症はいまだに残っている。

ポートした。

この3月をもって、同会の西枇杷島町での活動は終了したが、今後は、東

海水害におけるボランティア活動の検証を行い、災害時のボランティア活動について提言を行う予定であり、SVAとしても必要に応じて協力していく。

地元の団体と連携したSVAの支援活動

一番被害がひどかった愛知県では、行政、社会福祉協議会、民間ボランティア団体が連携して「愛知県広域ボランティア支援本部・名古屋市災害ボランティアセンター」が設立され、ボランティアを被災者宅に派遣する活動を行った。災害関係のボランティア団体のネットワークであり、SVAも加盟している「震災がつなぐ全国ネットワーク」(震つな)の要請をうけ、9月15~17

日、同センターの運営を支援するために、4名のSVA東京事務所スタッフ・ボランティアを派遣した。同センターは、9月30日をもって活動を終了したが、約4千件の被災者からの要請に対して、延べ2万人のボランティア派遣の調整活動を行った。



ボランティアセンターでの打ち合わせ(2000年9月愛知県西枇杷島町)

第2回 三宅島島民ふれあい集会より



「なぜ、自分たちがここにいるのか不思議な気分だよ。タイムスリップしたような…」。ある島民がこんな言葉を洩らした。2001年4月15日、東京都港区芝浦小学校で第2回三宅島島民ふれあい集会が開催され、約1800人の三宅島民が参加。この言葉は、神着木遣太鼓(かみつききやりだいこ)が披露され、手拍子をする人、涙を流す人などがいる中で発せられたものだった。

カンボジア大水害・三宅島噴火・東海豪雨支援事業 収支報告書

(2000年4月1日～2001年3月31日)

社団法人シャンティ国際ボランティア会
会長 松永 然道

区分	金額(円)	構成比
個人・団体寄付金	25,643,794	89.9%
外務省草の根無償資金協力(在カンボジア日本大使館)	2,894,780	10.1%
(1) 収入合計	28,538,574	100.0%
①カンボジア水害被災住民支援費	9,126,933	32.0%
②三宅島噴火避難住民支援費	1,100,000	3.9%
③東海豪雨被災住民支援費	1,800,000	6.3%
④現地派遣人件費	917,524	3.2%
⑤募金呼びかけ・記録・報告関係費	2,079,160	7.3%
(a)直接費小計	15,023,617	52.7%
(b)事務管理費 (a)×10%	2,253,543	7.9%
(2) 支出合計	17,277,160	60.5%
(3) 収支差額 (1)-(2)	11,261,414	39.5%
(4) 災害救援基金へ繰り入れ	11,261,414	39.5%
(5) 収支差額再計 (3)-(4)	0	

*収支差額の11,261,414円は三宅島島民の避難生活支援と今後の帰島の際の復興支援事業に使用する予定です。